

アーチルニュース ちえなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：arch1@luck.ocn.ne.jp

<http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou>

自立を支援する地域をめざして

平成18年度は、障害者自立支援法の施行により様々な戸惑いや問題が現れ、障害者の自立や人生をどのように捉えるのか改めて問われる年となりました。

そのような最中、仙台市は平成23年度までの新しい障害者保健福祉計画・障害者福祉計画中間素案を市政だよりやホームページなどで公表し、2月25日まで市民意見を募集しています。素案は、「誰もが生きがいや働きがいを持ち、自立した地域生活を送ることができるまちづくり」を基本目標とし、自立を「全面的な介助を受けていても自己選択と自己決定のもとに自分の価値観に基づく生活を送ること」と捉え、働く意欲をもって活動することを「働くこと」と定義しています。そして、人と環境の相互作用による自立と共生の地域社会の実現をめざした今後の主要課題を提起し、新しい障害観に転換することを呼びかけています。平成13年に国際保健機構（WHO）で採択された国際生活機能分類（ICF）は、個人の心身機能をマイナスで見る障害観ではなく、個人が持つプラスの面に着目し、一人ひとりを取り巻く環境条件を整えることで当事者の意欲が高まり、生活する力が引き出されるという、当事者を主人公とする視点で生活を見ていく立場に立っています。一人ひとりの人と環境との相互作用を調整するプロセスにおいて市民と行政の協働活動を促進し、自立と共生のまちづくりをめざしていきたいものです。ICFの視点は専門家主導の障害観に対する当事者運動から生まれたものと言われており、心身機能に障害があろうと無かろうと人生の主人公は当事者であるという当たり前のことを常に根本に据えたいと思います。素案では、現計画で「制度の谷間にある人たち」という括りにされていた発達障害者に対する支援についても、「発達障害者に対する支援体制の整備」として主要施策の一つに位置づけています。どうぞ、計画の中間素案をご覧頂き、ご意見をお寄せくださいますようお願いいたします。

さて、「ちえなっぷ12号」は、知的障害や発達障害を抱えた青年グループの活動を通じて分かった彼らの思いや希望をメッセージしています。彼らの苦手なことや出来ないことに着目するのではなく、彼らの積極的な思いや考えを受け止め、メッセージに共感する当事者、家族、支援者の輪を広げ、仲間を求めていきたいと思っています。

所長 今田 愛子

「地域で自分らしく暮らしたい！」 私たちの願いは特別じゃない

アーチルでは、相談支援の一環として、知的障害や発達障害の青年たちとグループ活動を行ってきました。本人が自分の思いや願いを表現できること、余暇を楽しむことができること等を支援することを目的として活動してきた結果、グループ活動が彼らの居場所、安心して活動できる場所としての役割を果たせるようになっていきます。しかし、彼らの地域生活をみると、自分らしく暮らすことができない現実があります。グループ活動の中で、彼らはたくさんの言葉を私たちに伝え続けてくれました。彼らの声をもとに、彼らが「地域で自分らしく暮らす」ことができるために、私たちは何をすべきか考えたいと思います。

仲間が欲しい！

困ったときに話を聞いてくれる人がいない。
(在宅の20代の男性)

未だに同年代と付き合うのが苦手。適当なことをしゃべれない。同じ方向の話題でもつまんだ話をすると茶化されて終わる。(求職活動中の20代の男性)

ずっと友だちもいなかったし、相談する人もいなかった。趣味が同じ人と楽しく過ごすことも知らなかった。(就労している20代前半の女性)

趣味の合う仲間がいるとうれしいということが分かった。(グループ活動に積極的に参加するようになった20代後半の男性)

友達とケンカして嫌な気持ちなのに分かってくれない。悩みを話し合うような友達はいない。(就労している20代前半の女性)

分かって欲しい！

もっと話を聞いてほしい。会話のキャッチボールをしてほしい。(就労している30代の女性)

僕は、障害の世界と健常の世界を行ったり来たりしていたけど、本当はそんな区別はないんだよね。(就労中の20代前半の男性)

嫌なことって絶対に忘れられない。学校でいじめられたことや、仕事場でどなられたこと。嫌なことが目の前にうかんで来て、嫌になってしまう。(ひきこもりになったことのある20代の男性)

僕が自閉症だって分かったから、親が優しく接してくれるようになったのかな？理解してくれたからかな。(長期在宅だった20代の男性)

職場の悩みは職場でも家でも言えない。(グループ活動に参加し始めた20代の男性)

やさしくしてくれる人はいたけど、理解してくれる人はいなかったかもしれない。(成人になってから自分の障害のことが分かった30代の男性)

どうせ話しても理解してくれないからあきらめている。(求職活動中の40代の男性)

どうしてもできないのに、『どうしても分らないの、努力しないからできないだけだよ。』と先生や親から言われ続けて辛かった。(就労中の30代の男性)

職員には本音は言えない。理解してもらえないから、親にも言えない。心配するから、怒られるから。自分は障害者と健常者の中間なんだ。だから苦勞する。(病氣療養中の30代の男性)

自立したい！

お母さんがいなくなったら、これからどのようにすればいいのかが心配なんです。(求職活動中の20代後半の男性)

もっと小さい頃に分かっていたら苦しまなかったのに。(求職活動中の20代前半の女性)

お母さんから離れて暮らすのがどんなことかわかんないから心配。自信がないから、きっと離れられないと思う。(就労している20代後半の女性)

本当は結婚したい人がいるのに、親が許してくれない。いつまでも子供じゃないのに。(就労している30代の女性)

高校生の時、大学にさえ入れれば人生がうまくいくと思いがまんじりました。(求職活動中の20代の女性)

お姉ちゃんにはいるのに、何で私には彼氏がないの？(就労している20代前半の女性)

本当はあきらめたくない！

彼らの思いや願いは、青年なら誰もが抱くごく当たり前の思いや願いですが、彼らからは実現することが難しいという現状が語られています。

本人たちの声に周囲の人々はどのように応えてきたのでしょうか？家族も、支援者も、厳しい現実の前に、どのように返答をすべきかわからずに困り、ひょっとしたら、本人と一緒にあきらめている場合も多いのではないのでしょうか？そして、本人の思いが社会に知られていくことがないままなのではないのでしょうか？

声をあげてみよう！

そんな中で少しずつですが、自分たちの思いを発信しようと立ち上がる青年が増えてきています。

彼らは、自らの思いを声にするを通して自信を持ち、自分たちから周囲に働きかけ、その声を受け止め共通の課題を抱えていることに気づいた家族や支援者などと協力して、様々な人たちとの出会いの場や交流の場づくりに取り組み始めています。彼らの発信が、身近な存在である家族や支援者の意識を変え、またそのことが彼らの意識を変えていくような相互作用をもたらしたのです。

一緒に考えよう！

地域で自分らしく暮らすためには、自分の願いや思いを周囲の人たちに伝え、その声に気付いた周囲の人が受け止めて一緒に考える必要があります。その積み重ねが、互いの意識を変化させていく相互作用へとつながるのです。

私たちは、彼らの声を聞くだけでなく、彼らの願いや思いをより多くの人に伝えて、理解者を増やしていきたいと思えます。

彼らの声を受け止め一緒に考える仲間を求めます。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch: 橋)」と「パル (pal: 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思っております。



ボランティア講座を実施しました

17名の参加があり、講義や体験実習などを行いました。講座終了後、「引き続き学びあおう」と希望があり、ボランティア学習会をはじめました。受講者



でなくとも興味のある方は、アーチルまでお問合せください。

真剣な様子。実は講師(当事者)とすごく勝負中!

知識として知っていることと実際のギャップが少し埋まった

参加してみて

今後の学習会を楽しみにしています。続けて参加したいです。

ボラとして外に出てみたり、体を動かしたり、料理を作ったりしてみたい。

自分から踏み出していけばいろいろな活動ができることが分かった。

第3回療育セミナーに300名参加!

「自分らしく暮らしたい! ~高機能自閉症児者の地域生活支援を考える~」をテーマとして、9月30日に療育セミナーを開催しました。今回は、本人・保護者と岐阜大学・別府哲氏からお話をいただきました。

藤原翔太さんとそのお父さんの靖さんは、翔太さんのこれまでの育ちや楽しみ、お父さんの思いをトーク形式で紹介しました。翔太さんは、「こんなに大勢の前で話すのは小学校の作文以来」と言いながら、「仕事でトラブルがあるけど、首になったら後戻りはできない」、「自分は障害者であっても元気でやっていける」、「将来結婚したい」と力強く話しました。最後にお父さんは、「たいへんなこともあったが、こんなに成長してくれた。子供のおかげで自分も楽しめた。どうにかかります、一緒に考えていきましょう。」とメッセージしました。参加者からは、「翔太さんが生き生きと辛いことも乗り越えている姿がまぶしかった」、「靖さんの『どうにかなるもんですよ』の言葉に励まされた」という感想を数多くいただきました。

別府先生は、将来を見通した支援と、そのための高機能自閉症の内面世界の理解の必要性をメッセージしました。参加者からは、「具体例が多く分かりやすかった」、「『頑張りすぎるからこどもに迫りすぎてしまう』という言葉に考えさせられた」という感想が多く寄せられました。

フォーラムを開催します!

第2回発達支援フォーラム IN せんだいを開催します。今回のテーマは「~育つ・暮らす・つながる 地域で生きる 地域が活きる~」です。ぜひご参加ください。

日時: 平成19年2月17日(土)13時~17時

場所: 仙台市太白区文化センター

楽楽楽ホール

講師: 日本自閉症協会千葉県支部支部長

大屋 滋 氏

内容: 今、発達障害児者への一貫した支援体制づくりが全国的に始まりました。今回は、「地域」をキーワードに、学校をはじめとした様々な機関が連携した具体的な取り組みを通して、育ちと暮らしを支える仕組みや人と人とのつながりについて考えます。

編集後記

今号では、特集にもかけはしにも青年たちの願いや思いをたくさん紹介しました。彼らのメッセージはみなさんに届いたでしょうか。

彼らのメッセージをそのままにせず、「自分にできることからやってみよう」と思い、行動することが大切なのだ改めて感じました。(首藤)